「もうやめよう！　日米安保条約」連続学習会●ＰＡＲＴⅡ●　第４回報告

# 日米安保と天皇ヒロヒト

天野恵一

三月二九日夜、ピープルズプラン研究所で、「もうやめよう！　日米安保条約」連続学習会の締めくくりとなる第４回「日米安保と天皇ヒロヒト」が開催された。報告者は、反安保実のメンバーでもあり、反天皇制連絡会のメンバーでもある天野恵一。以下に、当日の発言を要約して紹介します。文責は編集部にあります（編集部）。

＊　＊　＊

## はじめに

日米安保と天皇の問題が、ここ十年、二十年の幅で資料が格段と開示されて、見えるようになってきた。天皇ヒロヒトは日米安保条約を作っていく過程に、介入という以上に主体として動いて、マッカーサーの頭越しに国務省の親玉であるダレスと直接やり取りまでしている。ダレスとのやり取りで、日本全土を米軍がフリーに使える体制にする、そういう日米安保体制をそういう構造に作っていったのが天皇ヒロヒトであったことを、豊下樽彦さんが『安保条約の成立』（岩波新書）でまとめています。その前に有名なのが、沖縄をアメリカに売り渡して沖縄を自由勝手に使ってくれという天皇メッセージ。沖縄だけではなくヤマト全土もアメリカの自由使用という構造にまで、ヒロヒトの方が積極的に働きかけていったという歴史が読めるようになりました。今日の沖縄問題も全部そこから始まっている問題ですから、基地であれ安保であれ、こういう体制を作り出してきた政治的な責任者というのは、間違いなく天皇ヒロヒトなんで、天皇一族のところに普天間基地をもって行ったらどうかというのが、鳩山政権下でいろいろあった時に出した反天連のメッセージです。

きょうは、六〇年安保改定の時にヒロヒトが一体何をしたかということ、あるいは天皇制がどういうふうに機能したかという問題をそれ以降かなり集中的に調べましたので、その結果をお話します。

最初に信夫清三郎さんの『安保闘争史』（世界書院）という、このかん一番細かい政局史分析をやった本です。ここで信夫さんが紹介しているエピソードは、じつは安保が成立した直後にアイゼンハワーが日本に来て、ヒロヒトが迎えて、ふたりで車に乗ってパレードをして晩餐会へ向かうという、ヒロヒトを軸にした外交儀式を岸首相が準備していた、ということです。これは「日米修好百年祭」というお題目で準備されていて、後に皇太子夫婦がアメリカに行くプログラムも決まっていた。岸はもちろん六〇年安保改定の流れの中でそれを位置づけたわけで、ヒロヒトも、自分が作った安保条約ですからかなり積極的に、改憲問題についてもきちっとここで関わろうとアクティブに動いていると推定したのですが、その裏が取れた文章がいくつか拾って読めましたのでそれをまず紹介します。

## 安保条約締結とヒロヒト

八〇年後半段階で、『重光葵日記』が発売された。中央公論社だったと思います。それで初めて重光と天皇ヒロヒトとのやり取りが、重光サイドの資料で読めるようになった。重光葵はミズリー号での敗戦の調印の時に出てきている外交バッターの親玉です。東京裁判で戦犯として有罪判決を受けています、死刑ではなく、わりと早く政治家として戦後過程に復活した非常に曲者です。

一九五五年、重光がアメリカに行きダレス国務長官と会談する。制服組出身の親玉で、日本で言う防衛長官みたいなものです。重光とダレスが会談しそれに岸もくっついていくという構造で会談がなされるわけですが、

その前に重光がヒロヒトに会っている。そこでヒロヒトに何を言われたかということが、『重光日記』で読める。「一時過参入、拝謁す。渡米の使命に付て縷々内奏、陛下より日米協力反共の必要、駐屯軍の撤退は不可なり」――米軍を撤退させるようなことにしてはいけない、反共できちっとアメリカと一緒にやっていけという指示です。「自分の知人に何れも懇篤な伝言を命ぜられる」――アメリカ人に向けての暖かいメッセージを、いろいろ重光に頼んだという流れです。

基本的にヒロヒトのスタンスというのはまったく変わらない。とにかくアメリカの軍事力に依存しろということと、反共路線でアメリカとともに行けということです。その基本線でアメリカと交渉せよという話をヒロヒトが当時の副首相兼外務大臣にしているわけです。重光はそのメッセージを持ってダレスに会う。ダレスと重光が会った時にどういう会話になったか。この対談というのが、安保改定というのが初めて政治的プログラムの問題として日本側が口にした最初です。岸はその時びっくりするんですね、いきなり重光がそういうものを切り出したんで。当然岸もそうしなければいけないと思っていたけれど、仰天するやり取りが岸によって語られている。実際に五二年に結ばれたサンフランシスコ条約と同時に結ばれた安保条約というのは、駐留軍規定ですからいくらなんでもひどい。アメリカのやり放題であるのを当然とするのはまずいから、対等平等の関係に安保条約を結び直したいという建て前の発言を重光がすると、ダレスに一蹴される。ダレスの論理はどういうものかというと、たとえば相互平等、対等な関係で改定したいと言うが、米軍が例えば攻撃された時、日本の軍隊は米軍を護れるのか、日本の軍事力にそんな力がある訳ないだろうというものです。そのプロセスを岸も見ているわけです。そしてこの論理にどう対応していくかということで、六〇年の安保改定のプロセスのなかで、首相として岸は平和憲法を変えて武装力をもっと強くするという改憲のプログラムを設定した上で、安保折衝をするという土俵を設定する。この重光とダレスの会話は、岸の安保改定のひとつのベースになる。

前提として指摘しておかなくてはいけないのは、豊下さんが明らかにしていますが、安保条約の成立の時からアメリカは、「日本政府が米軍にいて欲しい」と要請しているという建て前を作りたい。なぜかというと、第二次世界大戦後の国際政治の中では、アメリカが主導する形で、植民地支配を無くしていこうという国際社会＝国連の動きというのがあった。米国は、ソ連との関係もあって、アメリカが日本を植民地のように自由に軍隊が動き回れるというように使っていると思われてはまずい。だから日本政府の要請によって駐留しているというかたちにしたかった。ヒロヒトがむしろそういう論理の構造を提案して、それにダレスが乗った。

そういうことを前提としているものを、「平等な関係にする」ということであれば、日本の軍隊に、米軍を護れるだけの軍事力がなかったら話にならんだろうというダレスの論理になる。これは、言葉のトリックなわけです。主権国家という建て前である日本に、米国が軍隊を置いて自由に基地を使うというまったく不平等な関係をどうするのかという問題がすりかえられている。分かり易く言うと、軍事国家同士の平等ということで言えば、米軍は勝手に日本に基地を置いて使ってもいいのであれば、例えばニューヨークに日本の自衛隊の基地を作って、日本が核兵器を持ち込んで使うことも自由にできる、となる。そういう話にならないで、日本は米軍を護る軍事力を待たなければ平等にならない――そういうアメリカの屁理屈で交渉が進んでいく訳です。ダレスが引いた土俵で交渉が始まっていく。結局岸はその線で論議を組んでいく構造になります。

一番最初にヒロヒトが作り出した安保体制のロジックがそのまま六〇年の改定でも出てくる。ただし、ヒロヒトの時は占領の直線的な延長ですから、占領軍が延長しているという非常に見えやすい構造だった。しかし、岸の右翼的ナショナリストというスタイルの幻惑もあって、対等平等になって日本も軍事力をつけていくという交渉が進んでいるようにアメリカも見せたし、岸もそういうふうに演出して見せた。そのプロセスでいろんな問題が起きてくる。

## 六〇年安保とヒロヒト

升味準之助という右翼ではないですけれど、体制的リベラリストみたいなポジションの実証学者が書いた『昭和天皇とその時代』（山川出版、八九年）に、こういう文章があります。「アイク訪日中止の理由は、治安上の不安であった。警察は、連日のデモ規制で疲労困憊し、首相官邸の安全確保もむずかしくなり、警視総監は、岸に『首相官邸を立ちのいてくれ』と求める始末であった。自衛隊の出動は、閣僚の反対も強く、防衛庁長官は、出動を拒絶した。天皇も混乱に巻き込まれそうになった。天皇は、アイクと宮内省のオープンカーに同乗して羽田から皇居までパレードするはずであった。天皇自身も歓迎儀礼に積極的であった。しかし、それは危ない。そこで防弾ガラスのベンツを考え、さらにヘリで羽田から皇居に迎えるという案もでたが、そんな屈辱的な歓迎をアメリカが受け入れるはずもない。閣議では中曽根康弘らがアイク訪日延期を主張した」。

ハガチー秘書官が来た時に、デモ隊の波にのまれてヘリコプターで脱出せざるを得ないような局面に追い詰められた。岸がここでこう言っている、「陛下自身がお迎えに行かなければいけない。そういう警備を考える時、これはできない、もし何かの間違いが生じたら、総理が腹を切っても相済まない。それで私としてはどうしても警備に確信が持てないと思って断ったんです」。

要するに、アイクはもちろんですが、天皇に失礼にあたるというようなことになったらどうするんだ、と右翼にもわいわい言われていた。自衛隊警備まで考えたというプロセスがあった。榊原亀之助の『天皇の年輪』（サンケイ出版、八一年）に、ハガチー事件と六・一五で、このパレードが完全にだめになった際に、宮内庁の内側でどういうやり取りがあったかについて書かれています。「百八十度の方向転換をされたのが、実情である。天皇はすでに警備上の不安があっても、羽田空港に大統領を出迎えることをお決めになっていたからだ」。断固として自分はどんなことがあっても行くんだというふうにヒロヒトは決めていた。ヒロヒト自身が安保条約を支え作った人間だったからです。改定にも当然主体的にコミットしたかった。

## 岸信介とマッカーサーの甥っ子

原彬久という人のインタビュー『岸信介証言録』（毎日新聞社、二〇〇三年）これがものすごく面白かった。岸は東大の金時計だか銀時計だかよくわかりませんが大変な切れ者ですから、問題の整理の仕方も非常にわかりやすい。そこに、「マッカーサー大使はハガチー事件の二日後、すなわち六月十二日岸首相と会談している」。甥っ子の方のマッカーサーです。「同会談における岸氏の発言は、それまでの強気の姿勢とは打って変わってハガチー事件そのものに対する岸氏の危機感と、『予定通りのアイク訪日』に対する重大な迷いを表わしていた。このマッカーサー大使との会談で岸氏が強調したのは、第一にハガチー事件が警察関係者の無気力と無能力のためであること、第二に「訪日延期」の最終決断には、警察当局の警備計画を把握する必要があるため、二、三日の猶予が欲しいこと」というようなことを言って、マッカーサーと会っている話が外交文書として残っていることが書かれています。この甥っ子の方のマッカーサーという曲者が動き回っていることが、ここでもよくわかる。岸は六〇年安保改定のために、ダレスやアメリカ側を口説くためにマッカーサーを使った。マッカーサーの甥っ子は岸と密着してずっと六〇年安保改定を併走した。ここにどういう問題があるか。

満州帝国というのはアヘンで経営されていた。東條英機がすでに満州にいて、東條・岸関係と、岸の周りにアヘンブローカーみたいな奴がいて、通常の財政ではとてもできないようなことを全部、アヘンからの収入によって回していた。そこには軍も噛んでいた。アヘン収入で帝国経営をやっていた。その中心人物が岸であろうことはほぼ間違いない。武藤富夫という人がかなり詳細に明らかにしている。そのブラックな、アヘンマネーが、日本の戦後の保守政治、岸の政治資金ではないかと。岸が戦後政治にカムバックしてくる時の巨大な資産はアヘンマネーではないかという推測はいろんな人がしています。しかし岸はそういうブラックなところはいっさい表に出さない人なんです。絶対お金で引っかかるようなことはしなかった。

隠ぺいする装置をいっぱい作ってやっていたのでしょう。東大出のエリート官僚でありものすごい合理主義者であることと、そういうものすごいヤクザな部分が一個の人格の中で何の問題もなく共存している、日本の政治家としては突出して面白い人です。そういう人が戦後ヒロヒトと組んだ。安保改定で戦後の象徴天皇制国家の設計者というのはヒロヒトであり、アメリカ側から見たらダレスとマッカーサーであり、表側は吉田茂です。裏側に常にヒロヒトがいて、六〇年改定で再度その構造を再編成した主役が岸です。占領時代が吉田ですから、吉田という政治家と岸という政治家がいないと、戦後の国家というのは作れていないわけです。保守合同から安保改定までの構造です。

それと、占領のトップだったマッカーサーに比べるとほとんど言及されることの少ない甥っ子のマッカーサーについても、いろいろ調べていくといっぱい出てきます。二〇〇八年五月三〇日の『週刊金曜日』に「砂川事件で新資料　日米安保の黒い霧――機密文章が物語る歪められた戦後史」という新原昭治さんへのインタビュー記事があります。

砂川判決（伊達判決）は一九五九年、安保闘争の渦中の判決です。米軍が駐留していることは違憲だという判決ですから、ものすごくアメリカもあせったわけです。新原昭治さんが見つけた公開された機密文書（外交文書）によると、判決の翌日朝八時に、「マッカーサー大使が藤山愛一郎外相に『東京裁判判決を正す』ため、露骨に最高裁へ跳躍上告を要請した」。とにかく早く最高裁へもっていって合憲判決にし直せと外務大臣に指示した。安保改定の秘密交渉があった時間の流れの中で、これも考えていいと思います。それで「最高裁で始まった審理の内容を外務省に報告させたのみならず、そこでの弁護側の主張に対する見解を逐次『コメント』して、国側の反論に反映させていた」。要するに自分の意見どおり国側に反論させていたんです。あげくに最高裁長官田中幸太郎を呼んで内密の話し合いをおこなって恫喝した。実際に跳躍上告されて、最高裁で違憲判決を覆した。法理論的に訳がわかんないことをやっている。なぜこんなことになっちゃったのかは、表だけ見ていると全然わからなかった。ただ日本の政府はいい加減だから、勝手に政府の意思でそうやったんだろうとみんな思っていた。ところが新原昭治さんがアメリカ文書から明らかにしたのは、マッカーサーの甥っ子というのが動いていたということです。安保闘争つぶしもあるし、安保の制度化のためにも全体的に動いた。ですからダグラス・マッカーサー二世なるものの動きというものも、戦後の政治史の中では欠かせないわけです。マッカーサーとダレス、そしてマッカーサーの甥っ子という、この三つの組み合わせが戦後の国家を形成してきた主役と脇役です。岸とはずうっと秘密会議をやっている。藤山愛一郎外相とも直接やっている。この過程にも岸はかんでいる。そういう構造で政治史を読み直していく必要がある。

そこら辺がこれで明らかにできる問題だと思います。もちろん天皇と岸のやりとり、この時何があったかは読めません。資料が全然ありませんからわかりませんが、一応アメリカの全面的な介入下にすべてが進んでいるプロセスを読まなければならないということだけは、はっきりしています。

## 従属的な日米関係を求める天皇制官僚体質

日高六郎さん編集の最もポピュラーな岩波で膨大に売れ続けた『一九六〇年五月十九日』。藤田省三さんの「前史」というこのアンソロジー論文のトップに入れられている文章で、彼はここで天皇制官僚という体質について、こういう言い方をしています。「しかも法による原理的権力制限は、自己を厳しく縛ることには堪えられない弱い支配者にとっては望ましいものではなかった。そこで天皇という特定人格への人格的恭順の感情を支配過程に組み入れることによって、権力の荒々しさと物理的な圧伏性を緩和しようとしたのである。精神的厳しさも物理的強力さも避けねば歩けない弱さがここに象徴的にあらわれているのだ」。ここの次がおもしろい。これは丸山政治学型の分析をそのまま使っているわけです。「権力緩和の方法は失っても、弱い支配者であることには変わりはないので、そこで官僚政治家は一つは国外に依存すべき相手を探す。本来縦の関係であ

## 9 日米修好百年祭／裸で話せば…

る恭順関係を本来横のものである国際関係に置き換えるのだ。その恭順の横倒し工作にとっては戦後占領時代の弁位置関係はもっとも適合的であった。本来の横の関係が一時的に縦になっていたからだ。官僚政治家はそれとともに、国内においてなりゆき主義になることで、強力な権力行使による社会現象の裁断をできるだけ避ける。時間の自然の経過に身を任せて、「何とかなってく」ことを期待するのだ。これなら主体的決断に伴う責任から逃れることができる。このアメリカの支配層と自然のカレンダーへの二つの依存の交替が戦後の官僚政治家の支配過程なのだ」。

藤田省三らしい、非常に読みずらい文章ですけれど、非常に面白いことを言っていると思います。今日の官僚支配にまでつながってくる、ある種の伝統ですね。要するに天皇を軸にした構造を、天皇をアメリカに置き換えて、アメリカに従属する国策という構造に置き換えて、延命してくる天皇制官僚のひとつの精神の形というものを、非常に面白く分析して見せていると思います。

### 「キシモイク、チンモイク、あーイク」

余談的ですが、六〇年安保闘争当時のマンガを最後に紹介します（上）。これは要するに岸とアイクの予定されていたパレードをもじって作ったパロディマンガです。このマンガの存在を知ったのは、昨年に栗原幸夫さに、「六〇年安保の時、天皇問題に触れているようなものは何かないでしょうか」と聞いたときに教えてもらいました。彼が国会デモで貰ったもので、デモ隊全体にかなり大量に撒かれていたそうです。非常に傑作なので紹介します。栗原さんからは、中野重治が「このビラは非常に下劣でつまらん」とどこかで書いていたということも教えてもらいました。このビラを作ったのは新日本文学会の文学学校の生徒たちだそうです。